

論文審査の結果の要旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 474 号	氏名	平良文享
学位審査委員	主査	工藤 崇	
	副査	松田尚樹	
	副査	上谷雅孝	
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>1 研究目的の評価 本研究は、チェルノブイリ原子力発電所 (CNPP) 周辺地域、およびセミパラチンスク核実験場 (SNTS) 周辺地域における土壌放射能汚染の現状とそれから予測される外部・内部被ばくを検証したもので、目的は十分に妥当である。</p> <p>2 研究手法に関する評価 上記の目的のために、2009-2010 年にかけて当該地域で採取したキノコ類、土壌、およびセミパラチンスク地域では岩石の放射性核種分析を行い、長崎の値と比較すると共に、得られた ^{137}Cs の値から計算される外部・内部被ばく線量を計算しており、研究手法も妥当である。</p> <p>3 解析・考察の評価 上記手法で解析した結果、CNPP 地域で ^{137}Cs の土壌、キノコ類の汚染が依然認められ (コロステン市でそれぞれ 19.3KBq/m^2, 2635Bq/kg。長崎ではそれぞれ 0.04, 1.7)、実効線量も高めの値を示した (コロステン市で外部実効線量 1.7×10^{-1}, 内部実効線量 6.2×10^{-2}, 実効線量 2.3×10^{-1}, 長崎ではそれぞれ 1.3×10^{-4}, 1.3×10^{-4}, 2.6×10^{-4}: 単位 mSv/y)。SNTS 周辺地域ではバラパン湖 (核実験による人工湖) において、岩石に人工放射性核種が依然認められたが、セミパラチンスク市 (および長崎市) では人工放射性核種は不検出であった。これらのことから、CNPP 周辺地域において放射線被ばくのリスクが依然残っていることが明らかとなった。今後の放射線による健康リスクの長期追跡が必要であることが示された。</p> <p>以上のように本論文は放射線健康リスク研究に貢献するところが大きく、審査委員は全員一致で博士 (医学) の学位に値するものと判断した。</p>			